

プロトアーサーな衛宮君

二刀流に憧れた中二病

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

共に戦う者は勇者でなくてはならない
心の善い者に振るつてはならない

この戦いが誉れ高き戦いであること

是は、生きるための戦いである —— 《ケイ》

是は、己より強大な者との戦いである事 —— 《ベデイヴィエール》

是は、一対一の戦いである事 —— 《パロミデス》

是は、人道に背かぬ戦いである —— 《ガヘリス》

是は、真実のための戦いである —— 《アグラヴェイン》

是は、精霊との戦いではない事 —— 《ランスロット》

是は、邪悪との戦いである事 —— 《モードレッド》

是は、私欲なき戦いである事 —— 《ギャラハッド》

是は、世界を救う戦いである事 —— 《アーサー》

是は、誉れある戦いである事 —— 《??》

—— この十三の決まりの内、議決により過半数の承認を得た時のみ、完全解放を許可する事とする

是は、正義を布く戦いである事 —— 《衛宮士郎》

目次

プロローグ	1
Fate/stay night	
設定＋高校生になるまでにあつた事オオオ	5
第1話 運命の夜	8
第2話 セイバー	13
第3話 アインツベルンとの遭遇 (修正版)	18
4話 無限の剣製	21
番外編 アーサー君のFGO日常＋主人公のステータス	34
5話 戦いの果てに	39
6話 最強	43

プロローグ

主人公 side

俺はいつも通り家に引き籠もり、FGOをやっていた。プロトアークサーを狙う為である。

……ここままでどれだけの庄司を貢いだ事か……今こそ当てる時だ！

行くぞ、運営。確率の設定は十分か。

そんな事を思いつつ、俺はコンビニへカードを買いに行った。

だが、運命と言うのは残酷である。

それは俺がカードを買い終わり、家に帰る途中だった。血走った目をした男がこちらへ向かってきた。

——あいつは……中学のころ俺を苛めてた奴か……

俺は奴と、あと三人に苛めを受けていた。俺は我慢し、高校まで乗り切った。しかし、今になってなんであいつが……俺は中学以来あいつとは遭遇してない筈……

ふと、あいつが声を発する。

「オ前エエ！苛メノ事ヲオ！バラシタナアアアア！オ前ノセイデエエエ！オレノジンセイガアアアア！ゼンブウウ！リフジンナコトオオオオ！オマエガアアアアア！」

そう憎悪に満ちた言葉を発しながら俺にナイフを向けてきた。

そんなものを向けられた所で俺は一般人。聖剣も持っていないし、無限の剣も持っていないし、ましてや主人公補正と言うものもない。

——詰んだ……俺の人生も終わりか……ああ、せめて、死ぬ前に、プロトアークサー……当てたかったなあ……

そう思いながら、俺の意識は沈んでいった。

?? side

おや、僕を呼ぶ声が聞こえた……もしかや僕の肉体の主の声かな？

今頃になつても既に遅い、か。いや、待てよ……死んでも生き返る方法……本来なら死者を冒瀆する行為ではあるけど……神様と言うものには、転生と言う形で生き返らせて貰おう。

日常に溶け込んだもう一人の僕の反面。どうか、転生先でも頑張っておくれよ。聖剣は、なかなか頑固だ。理解する事が……必要だからね……

主人公 side

ん……なんだ……ここは……俺は、確か刺されて死んだはず……

「目覚めたようだね。」

声のしたほうを見ると、イケメンが立っていた。

「イケメン死すべき！慈悲は無し！」

これは宣言しなければ気が済まない！

「神様にそれは無いんじゃないかな……アハハ……」

くつ、内面までイケメンときた！こいつあくせえ！イケメンの臭いがプンプンするぜえ！

「アハハハハ……まあ、本題に入らせてもらおうよ。」

「あ、うん。」

「君には転生の権利が与えられた。理由は、君の肉体は並行世界のアーサー・ペンドラゴンのものなんだ。普通彼は英霊として座に行く筈だけど、何故か輪廻転生や何かしらの手段によって肉体と魂が別に時代へ生まれ変わってしまったんだ。流石に英霊を死んだままはい終了、という訳には行かないんだ。しかも、彼は恐らく世界で一番有名な英雄だからね。消えてしまうと後処理が大変なんだ。と、言う訳で君に権利を与えたのさ。」

マジか、ずっと狙い続けたプロトアーサーなの、俺の身体。なんか運動神経と頭が良かったのってそのお陰なのか。ん？待てよ、魂も来てるってことは俺の中に……

『その通りだよ。僕の半身。』

うおっ！びっくりした。まじでアーサー王だ

『いやあ、こうして話すのは初めてだね。君がさつき言ってた運動神経の良さは魔力放出を微量にしながら、尚且つ基の身体のスペックが高いのと、頭脳が良かったのは直感スキルで常にいい選択をしていたからだよ。まあ、転生先でも頼んだよ？僕の半身。』

お、おう。こつちこそ頼むぜ、相棒。

「さて、じゃあそろそろ転生について説明するよ。まず、君が転生するのは必然的にFateの世界だ。アーサー・ペンドラゴン、彼の存在を他の世界に存在させてしまうと、Fateという世界での大混乱がおきる。さつき説明しようにね。」

さて、ここから本題だ。転生には一つだけ特典がつくんだ。でも、Fateの世界を崩壊させるような特典は駄目だよ？さあ、どうするんだい？」

ふむ、特典か。やっぱり竜の因子とか？アルトリアは持ってたし。あると確か……息をするだけで魔力が生成される、だっけか。よしこれだ。

「竜の因子、だね。分かったよ。じゃあ、最後に君の世界での立ち位置を説明するよ。君の立ち位置、それは主人公である衛宮士郎だ。彼の肉体をアーサー君のものにして、魂を君と彼の複合体にするよ。因みに聖剣だけど、流石にあの時代では神秘が薄くて顕現する出来なかつけど、流石に顕現させる事が出来るよ。そこは安心してね。」

ふむふむ。

「じゃあ、アーサー君と共に、第二の人生、楽しむんだよ？」

その言葉を最後に、俺の意識は薄れていった。

士郎side

俺は士郎。最近頭にどんどん記憶が入ってくる。なんだろう、よく分からない。

うっ、きよ、うは……さす、がにい……や、ばい。うあ。

そこで俺の意識は、消えた。

主人公side

ふう、何とか土郎の意識と融合する事に成功した。少し罪悪感はあるが、許して欲しい。さて、今日から頑張るかねえ。

F a t e / s t a y n i g h t

設定＋高校生になるまでにあつた事オオオオ

設定

真名：衛宮士郎（アーサー・ペンドラゴン）

クラス：セイバー（冠位）

ステータス

筋力：A＋

耐久：A

俊敏：A＋＋

魔力：EX

幸運：B＋

宝具：A＋＋

宝具：【嘗ての栄光は未だ果てん】（アンリミテッド・ブレイドワー
クス）

ランク：A＋

??

レンジ：??

詠唱

体は剣で出来ている。

血潮は鉄で、心は硝子。

幾度の栄光を経て不敗。

ただ一度の闇は無く

ただ一度の敗北も無し

担い手はここに一人

彼の丘で希望を照らす

ならば、我が生涯に偽りは無く

この体は、無限の剣で出来ていた。

宝具：【約束された勝利の剣】（エクスカリバー）

ランク：A＋

対城宝具

レンジ：10～100

詠唱

——十三拘束(シールサーティーン)——円卓議決開始(デイシジョ
ン・スタート)

『承認』

是は、己より強大な者との戦いである事 —— 《ベデイヴィ
エール》

是は、人道に背かぬ戦いである —— 《ガレス》

是は、精霊との戦いではない事 —— 《ランスロット》

是は、邪悪との戦いである事 —— 《モードレット》

是は、私欲無き戦いである事 —— 《ギヤラハッド》

これは、世界を救う戦いである。

是は、世界を救う戦いである事 —— 《アーサー》

約束された、勝利の剣。

説明

真名を衛宮士郎。またの名をアーサー・ペンドラゴン。彼は転生者である。唯の一般人だと思っていたが、実は肉体が並行世界のアーサー・ペンドラゴンだと言う事を死んだ時に知った。彼はアーサーの肉体と魂の器となったのである。

主人公 side

俺は士郎。10歳。段々と前世の記憶が薄れてる気がするけど、別談、原作を知らなくてもそれはそれで分からないりの進め方があるのではないのだろうか。

さて、まだ俺は切嗣に引き取られる、つまり大聖杯によって起こされる大災害が起こる確か1年前だ。因みに、この士郎の体に転生したのは5歳だったので、それなりにイージーモードを進んできた。勉強だけはギリギリ覚えてた。友好関係もなるべく広げてきたし、近所の人達とも仲が良くなった。運動なんて目に見えるほどの出来だ。うん、やっぱ俺の身体って凄いな。

『そりゃあそうだよ。僕はこれでも騎士だからね。王としても騎士としても、認められる為には努力をしたからね。』

まあなあ。

で、まあ今日はクリスマス。大災害までのこり2カ月。

あまり時間が無い。今の内に剣技をもつと習得して、身体能力をあげないといけない。なにせ、この身体にアヴァロンなんて埋め込まれたが最後大変な事になりそうだからな。だって既に竜の因子持っているんだぜ？なんか、その、混ぜたら危険っぽいじゃん？手なわけで、アヴァロンの埋込みを阻止するためにも生き残る手段を得ないといけない。最悪、大聖杯に向けて今出せる最大出力の「約束された勝利の剣」を放つ。こうでもしなきゃ生き残れないからな。(他の人も) さて、俺はこれからまた母さんに遊びに行つてくると称して修行しないといけない。じゃ、またな。

その2ヶ月後、冬木市で広範囲の大災害が起こった。被害は甚大。原因は不明。目撃者のうちで、輝く希望の光のようなものを見たらしい。因みに、生存者は“1人”。20代後半の男性に助けられたとの知らせがあった。

第1話 運命の夜

主人公 s i d e

俺は衛宮士郎。今年で17歳だ。俺は切嗣にアヴァロンを埋め込まれるのを回避しようとしたが、何故か無理だった。おかしい、絶対におかしい。案の定、化学反応的なのを起こして、最初全部で30本だった魔術回路が、恐ろしい数の1500位まで引きあがった。おかしいよ。切嗣に魔術回路の数を見られた時は驚かれた。まあ、そりゃね？

投影魔術の鍛錬は怠らず、ちゃんとやっていた。身体強化も。投影に関しては回路の数がイカれてるのと、魔力が息するだけで生成出来るってだけあって、普通に神造兵器が投影出来た。え、やばくね。原作どこいった。神造兵器投影出来ないじゃねーのかよ。てか、これ慢心王にバレたら殺されるくね？てか、アーサーのお陰で俺の目って慢心王の千里眼とか胡散臭い魔術師の千里眼位になってるから解析の精度がとんでもない。スキルで表すとEXくらい。まじやべー。あ、あと「約束された勝利の剣」(自分の)を切嗣に見せたら泡吐きながら白目剥いてた。まあ、当然の反応だよね！

なんやかんやで、俺は大災害乗り越えーの、投影ヤバくなりーの、愉悦神父に目つけられーの、ん？待てよ。愉悦神父って……クソがあああああ！

さて、俺は取り敢えず学校に行かないといけない。今の時間は7時59分。遅刻時間が8時15分。約10分でつかないといけない。という事は、だ。魔術で身体コーティングして、走りつつ魔力放出して行かないと間に合わない。ワオ、見られたら俺お終いジャン。特にあかいあくまとか。よし、覚悟を決めて行こう！いざ逝かん！（逝かんの漢字イイ）

?? s i d e

あれは…… 衛宮君？何でこんな時間に……

え……？なんで、衛宮君が、魔術を…… おかしい。あれは何か隠

してる。確実に一般人じゃない。

この町のセカンドオーナーとして近々接近しないと。

主人公 s i d e

ふう…… 何とか間に合った…… 見掛けられることは無かったぜ…… (見られたことに気付いていない) 恐らく、臆気に覚えてる俺の記憶だと、丁度今日がランサーに殺される日だった筈。よし、ここはいっちよ、俺の存在を見せるために思いつきし上から『それは愚策だよ』あ、やっぱ駄目？

『駄目に決まってるじゃないか！そんな事したら君が聖杯戦争で生き残る確率は格段に減るんだよ!?分かってるの!?!』

あ、すんません。ハッキリ言うとは軽く考えてた。いやあ、なにせ、もう自分の投影魔術の正体暴いてますしい、魔力ヤバイですしい、回路ヤバイですしおすし。

『とにかく……ここは一度殺されるんだ!』

ええ!?なんだその理不尽な…… 死ねってなんだ死ねって!いくら何でもひどいゾ!

『その方が都合がいいの!』

はあ…… 分かったよおお。ちきしょう。エミヤさんにドヤ顔したかったのに。

——— その日の夜、俺は取り敢えず殺された。そして生き返った。つまり

- 1、俺は攻撃をおこな『それは失策だったぞ』……
- 2、『一変死んでみろ』死にたくない!
- 3、様子見ろ。
- 4、主人公が死んだ!このひとでなし!
- 5、あかいあくまがあらわれた
- 6、俺!復活!↑今ココ

まあ、とりま1回死んで生き返って今猛特急で家に帰宅してるところだ。

さて、そろそろか。犬がくるのは
ガシャン！

「ほう、今のを避けるか。やるな小僧。あと、お前心の中で俺を馬鹿にしなかったか？」

あらかやだ、この人…… 貴様ツ！見ているな!?

さて、先ずは手始めに【刺し穿つ死棘の槍】を投影するか。

【投影、開始】

俺は手に魔力をまわして、基本骨子を想定し、強度や材質、それぞれを投影していく。僅か数秒の操作であるが、なかなか集中力がいる。

「ツ！テメエ！何故俺の槍を持ってやがる！答えろ！」

「真似たんだよ。お前の槍を読み取ってな。」

「なんだとお！」

そう激昂しながら構えを取って、猛犬のようにこちらを睨みつけてくる。

「怒っているのは分かるが、被害をあんま出したくない。庭でやろう。」

「いいだろう。」

そう言って俺達は庭へ出る。

「さて、それじゃあ早速行かせてもらうぞ、ランサー。いや、クー・フリーン。」

「ほう、俺の真名を当てたか。ふん、来いよ。」

その言葉を聞いて、俺はランサーに向けて疾走する。狙うは一点。心臓のみ。先ずは陣形を崩す。

「くっ、な、なに！小僧！褒めるのは癪だが！テメエの槍捌き！俺と同じ、くれえじゃねえか！」

「これでも！全武器種！扱えるよう！頑張ってるんで！ね！」

やつの槍を飛ばす。よし！今だ！

槍に膨大な魔力を込める。

【刺し穿つ死棘の槍】 ツ！

この槍に込められしは因果逆転の呪い。これは、簡単に言うと、先

に心臓を刺した、という結果をつくつていおいてから放つというものだ。お前の死因は知っている！敵に奪われた自らの槍で刺されたからだ！つまり、お前はこの槍には勝てない！

「ぐっ、解放出来んのかよ!?ぐはあっ！」

奴の心臓に命中し、ランサーが血反吐を吐く。

「小僧……結構やるじゃねえか。英霊に人間が、ましてや魔術師が勝つなんてな……まあ、楽しかったぜ。また会ったら、今度は俺がその心臓突いてやらあ。」

満足気な表情を残しながら、ランサーは消滅していった。

疲れた。よし、寝る前に召喚だけはしとかないと

——移動中

さて、始めるか。

「素に銀と鉄。

礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。

る三叉路は循環せよ

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至

閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

——告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

よし、令呪はOKだ。後は……

白い煙のようなものがとれ、姿が見えてくる。

「問おう、貴方が、私のマスターか。」

目の前には、黄金の髪を持ち、幼さを残す完璧な顔。西洋のプレートを身に纏い、青いドレスをした女性が居た。

第2話 セイバー

主人公 side

目の前には、騎士が居た。金色の髪を持ち、完璧な顔立ち、銀色のプレート。騎士が声を発した。

「問おう、貴方が、私のマスターか。」

「ああ、俺が君のマスターだ。よろしく頼むよ、セイバー。」

「こちらこそ。これより我が剣は貴方の為に、ここに誓いましょう。」
やはり、アルトリアか。まあ、俺の中に【全て遠き理想郷】がある時点で基本決まってるもんな。他が出るっていつでもマーリン位だしな。さて、ステータスは……

真名：アルトリア・ペンドラゴン

クラス：セイバー

筋力：A+

耐久：A

俊敏：A++

魔力：A+

幸運：A

宝具：A+++

【約束された勝利の剣】

ランク：A+++

対城宝具

レンジ：10～100

説明

これこそ人々の願いが星々によって鍛えられた【最強の幻想】（ラストファンタズム）。彼の王が常勝を歌う最強の聖剣。

保有スキル

カリスマ：A+

魔力放出：A++

直感：EX

クラススキル

対魔力：EX

騎乗A

おお、魔力量だけでこんな上がるのか。凄いな。元々のステータスも高いからステータスなんてA以上しか無い…………

「ッ！マスター！このステータスは!?!」

「それは俺の魔術回路と魔力が原因なんだ。俺は1500本ある。魔力はステータスで表すならEXだろう。」

「なんと………… 私はいいマスターに出会ったのですね………… 改めて、我が剣はこれより貴方の為に。」

こうして、俺とセイバーは、聖杯戦争に望む事となった。

3人side

「天秤の守り手よ!」

その言葉とともに、召喚が完了される。

「ふむ、とんだ貧乏くじを引いたものだ………… サーヴァントアーチャー、召喚に応じた。さて、君が、俺を呼び出したマスターか?」
彼女の前に立っていたのは、色素の抜けた白い髪を持ち、浅黒い肌の、赤い外套を纏った男だった。

「ええ、私が貴方のマスターよ。初めに言っておくけど、私の指示には絶対に従う事、良いわね?」

「ふむ、それは出来ない相談だ。私は私で、勝手にやらせてもらうよ。」
「何ですってええ!…こうなったら!」

彼女が令呪をアーチャーに翳す。

「ま、待つんだ!…こんな事に令呪を使うなど!考え直せ!」

「うるっさいわね!?令呪を持って命じるッ!アーチャーは私の命令に絶対服従!」

3つあった令呪が1つ減り、2つとなった。

「信じられないぞ君は………… こんな事に令呪を使うなど…………」

「とにかく!私の命令には従う事!いいわね!」

「はあ………… やれやれ、先が思いやられる…………」

長々苦戦しそうなマスターとサーヴァントである。

主人公 side

「さて、セイバー、これからの方針を考えていこうと思ってるんだが、いい案はあるか？」

俺とセイバーは今、聖杯戦争の方針を決めている。何の計画も無しにやるのは不確定要素が多いからだ。いくら陣営が強いといえども、慢心をしてはいけない。

「そうですね。先ずはアサシン、キャスター等から倒すべきだと思います。」

『そうだね。先ずはアサシン、キャスター等から倒すべきと思うよ。』
わお、やっぱり同じ人だから考える事がスゲーぴったしあつてる……

「それもそうか……俺の考えとしては、アーチャー、バーサーカーから先に倒そうと思ってるんだが……」

「何故ですか？」

『何故だい？』

「確かに有利な相性の奴から倒した方が安心はできるが、現実性が無い。苦手な奴を強行突破で先に倒しておけば、後で他のサーヴァントを倒す時邪魔が入るなんて事も、無いんじゃないか？」

「確かに……一理あります……」

『確かに……一理あるね……』

……さつきから気にしないようにしてたけどやっぱりハモってるよね！（主人公の中で）

「じゃあ、俺の考えた方針でいいか？」

「勿論です。元より、貴方がマスターなのですから。」

『問題無いよ。それでいいと思うよ。』

「よし、今日は取り敢えず寝るぞー。もう夜だしな。」

「そうですね……では、布団へ行きましょう。」

「ああ。」

と、俺が言って布団の部屋へ歩いていく。

「よし、寝るか。」

「はい、では、おやすみなさいマスター。」

ん？あれ、セイバーさん？

「その、セイバー……寝るのはいんだが、俺の部屋で一緒の布団で寝るっているのは……」

「何が問題なのですか。私はマスターの身を守る為に常に傍に居なければいけないのです！」

「ああ！もう！こうなったら意見変えないタイプじゃないか！

……不本意だけど、良いよ。あと、マスターって言うのは堅苦し
いから、俺の事は名前前で呼んでくれよ。士郎でいい。」

「分かりました士郎。」

余談だが、その後心臓がバクバクし過ぎているとの、彼女から漂う甘い匂いが香ってくるので、1晩中寝る事は出来なかった。

――案の定、学校で居眠りをしていた。

く、今日はいつの間にか学校で寝てた。慣れないといけないのか……しょうがない。頑張ってみるか……

「ねえ、貴方、衛宮士郎君よね？少し話があるのだけれど。」

そう声を掛けてきたのは、学校のアイドル的存在。遠坂凜だった。

「いいけど、何処で？」

「屋上でどうかしら。」

「分かった。」

そう言っって俺達は屋上へと向かう。

――移動中

「さて、話つてのはなんだ？……アーチャーのマスターさん。」

「あら、気付いてたの？セイバーのマスター君。」

「勿論だ。」

「それで、話つていうのは、貴方に同盟を組んでほしいからよ。」

「同盟？そりやまた何で。」

「だって貴方、セイバーを召喚したんでしょ？ステータスダウンして

ても十分戦力になるもの。」

ん？何か勘違いしてないか？

「その、遠坂？でいいのか。セイバーのステータスは、下がるって言うか、逆に生前まで近づいてるんだ。」

「……え……？」

「なんでかって言うとな？俺の魔術回路、とある事情で1500あるんだよ。魔力とかはステータスで表すんならEX位だしな。」

「え、ええええ!!?1500本ですってえええ!!?何よその数!!?おかしいでしょ!!?しかも魔力がEX並!!?信じられないわ…… 使える魔術は何?」

「投影と身体強化だ。他のは属性が合わないんだよ。俺の属性は剣。因みにその影響かは知らないけど、俺の投影魔術は普通の奴とは違ってな。投影したら俺の意思で消すか、壊すかしないとこの世に残り続けるんだ。宝具もな。」

「もう驚かないわ…… 貴方が相当出鱈目っていくのはよく分かったわ…… じゃあ改めて、同盟を組んでくれるわね?」

「ああ、いいよ。こつちとしても安心性が増すしな。」

「じゃあ、よろしく頼むわね。」

「ごちらいこそ。」

そう言つて俺達は同盟を結んだ。これで聖杯戦争も上手く進める筈だ。

よし、今日は放課後にサーヴァント探しに行くか。

第3話 アイんツベルンとの遭遇 (修正版)

主人公 side

俺は今遠坂とセイバーと共にサーヴァントを探している。把握をしておきたいからな。アーチャーは遠くに居るらしい。

「うーん、せめて1体位はサーヴァントを確認したいのだけれど……」
「そのうち見つかるよ。たぶん。」

俺が曖昧な事を言うと同時に、俺達のもとへ少女が現れた。銀色の髪に、将来は相当な美人であろう顔立ち。

「御機嫌よう。私の名前はイリヤスフィール・フォン・アイんツベルン。よろしくね? 遠坂凛、そして、お兄ちゃん。」

「あんたが出張ってくるとはね…… それで? 自慢のサーヴァントは?」

「いいわよ、行くわよバーサーカー。」
すると、突然、巨体を持った何かが現れる。

「なっ?! バーサーカーのサーヴァント!?!」

アーサー、奴の強さは……?

『恐らく君のステータスを超えるだろう。今回ばかりは投影だけじゃ難しいと思うよ。相手の動きをトレースしても、本物には追いつかない。…… 最悪、聖剣を使った方がいい。』

やっぱりそうか…… くそっ、今回はあれを使うか……

『あれ? 何のことだい?』

決まってるんだろ…… 合 (ry 嘘ですすみません。

んで、あれって言うのは俺の唯一無二の最強にして最弱の、
―― 勇姿たちの武具が眠りし世界さ。

「遠坂。俺に任せろ。」

「え……?」

「バーサーカー、お前の動きを真似る事は到底俺には出来ない。だが、叩き落とす事なら、俺に唯一出来る。

体は剣で出来ている

血潮は鉄で、心は硝子

幾度の”栄光”を経て不敗
ただ1度の闇は無く
ただ1度の敗北も無し
担い手はここに1人
彼の丘で希望を照らす
ならば、我が生涯に偽りは無く
この体は、無限の剣で出来ていた。」
俺がそう唱えると、世界が塗り変わっていた。

———これこそ、自らを理解し、王としての機能を発動する為の世界。円卓の騎士達の魂が込められた宝具と言える武具が内蔵されている世界。

黄金に輝く大地、無数に刺さっている騎士達の武具、そして、俺の目の前に刺さる、【最強の幻想】。

「そう、俺は、お前を叩き落とす為に、世界を創る。ここにあるのは嘗ての臣下たちの残した武具。これが、お前に凌げるか。」

「や、やっちゃえー！バーサーカーー！」

「■■■■■■■■■■ツ!!」

バーサーカーがマスターに指示され、雄叫びを上げながらこちらへ向かってくる。

「いけー！」

数々の武具達がバーサーカーに放たれる。恐らく1発は入る筈、奴の技量は計り知れない。

「■■■■■■■■ー！」

次々と受け流していく。やはり、バーサーカーと言えども英霊か。強い。

とうとう奴の心臓に刺さった。終わりか。
ん？なっ!?

「■■■■■■■■■■」

次の瞬間、バーサーカーが復活する。

「まさか………… お前は………… ヘラクレス!? バーサーカーで召喚され

ていてもあれだけの技量があるだと……馬鹿な……」

俺が油断したすきに、ヘラクレスは俺に剣を向けた。

「ぐ、ああああ！」

俺の肩に奴の石剣がくい込む。

——痛い！痛い！痛い！くそつ、すげー痛てえ！

「期待はずれね……1回削ったから面白いかなと思つたのに。じゃあね、お兄ちゃん。」

「■■■■ツ！」

くそつ、まだまだ、まだまだ、まだ！終わつてねええええええ！

「うおおおおおおお！」

その、鞘の名を呼ぶ。

「【全て遠き理想郷】（アヴァロン）！」

ヘラクレスの攻撃を、アヴァロンの所有者に対する害を無効化する能力で、防ぐ。

——これでいい。今回は1度、帰ろう。もう、意識が……朧……気に……

——その後、士郎は遠坂達に発見され、直ぐに家に運ばれた。

4話 無限の剣製

主人公 s i d e

夢を見た。

それは王としての“自分”

臣下に慕われ――裏切られ

民に讃えられ――憎まれ

それでも生涯たった1人で、異世界を巡り、秩序を守り続けた、そんな、歴然とした正義を持った、《騎士王》だった。

そこで夢は途切れた。どうやら目が覚めたようだ。

俺は確か、バーサーカー、ヘラクレスとの戦いに敗れ、そのまま自身の魔力を使って境界から出たのち、恐らくそのまま遠坂達と共に帰還したのだろう。俺は倒れていただろうが。

さて、体ももう問題無いし、朝飯を……あれ、起き上がれない。何かに腕を持たれている。その腕は右腕なので、そちらを見てみた。そこにいたのは人形のような可愛い容姿をした金色の髪の少女……ん？

「すうー……すうー……」

おおおおお落ち着けえええ衛宮ししし士郎。そそそそそうだ、こここれゆゆ夢なんだ。もももももう一度ねねね寝ればあばばばばば

「ん……？ああ、起きたのですか士郎。所で、何故そんなに顔を赤くしているのですか？もしや発熱でもしたのですか!？」

「いいいいいいや、そそそそそんなこここ事はなない。だだ大丈夫だだだももも問題無い。」

はっ、そうか！素数を数えるんだ！あれ、でも素数ってどんなだっけ。やべ。思い出せね。

よし、第2案だ。俺はc o o o！作戦。そうだ！俺はあのジャンヌ信者のように超c o o oだぜ！よし！これだあ！

「本当に大丈夫だ！安心しろセイバー！」

「？よく分かりませんが、問題ないならいいです。では、朝食にしま

しよう。恐らく凜が作り終えている頃でしょう。」

「え、遠坂もいるのか？」

「ええ、当たり前です。士郎達がいなくなったと思ったら、突然帰ってきたのですから、1時間後の事でしたが。しかも帰ってきたと思えば気絶して倒れてますし。驚きました。」

「やっぱり倒れてたのか……迷惑掛けちゃったな……」

「ごめんなセイバー。俺のせいで。」

「いいのです……それに少しカッコ良かったですし」

「ん？何か最後言ったか？」

「い、いえ、何も言っていません。」

まあ、いいだろう。取り敢えず、俺達は遠坂のもとへ向かった。

（移動中）

「あ、衛宮君、セイバー、起きたのね。おはよう。」

「ああ、おはよう遠坂。ところで何でそんな適応出来るんだ？」

「ほら、あれよ。私はどこでも住めば都って思ってるから、ほら、ね？」
ぎゃ、逆に凄いな。

その後は、俺とセイバーで何があったか等説明し、遠坂はとある事を話した。

「そうそう、実はね？……アーチャーが……霊体のままどっか行っちゃって行方が分からないの。」

多分もう殆ど無いに等しい俺の記憶の中に【破戒すべき全ての符】ってやつがあったな。それでマスターとのパスを切って単独行動している……？

「遠坂、キャスターについて何か知ってる事はないか？」

「んー……特に無いわね。」

「俺が調べて分かったんだが、奴は【破戒すべき全ての符】っていう、魔術効果を無効、もとい、初期化出来る短剣を持ってるんだ。もしかしたら、それをアーチャーが知ってて、どうにかして使ったんじゃないか？例えば自分からキャスターのどこへ行って寝返りするとか。」

「あ！思い出した！そういえばアーチャーって《投影魔術》使ってるの

よ。それで宝具も確か投影出来た筈……つまり、多分アーチャーは【破戒すべき全ての符】を投影して、自分に使ったんだわ。となると、どっかに潜んでるとしか分かんないわよね……」

遠坂の言う通りだ。でも、何も出来ない。ここは別陣営を何とかするべきだろう。

「遠坂、今はアーチャーが無理なんだ。先に他の陣営を崩さないか？例えば厄介なアインツベルンのバーサーカーとかを。」

「それもそうね……衛宮君、もう体は大丈夫なの？」

「ああ、ピンピンだ。バツチリ。」

「本当に？まあ、衛宮君だから多分すぐ治ったんでしようけど。」

「ま、そういう訳だ。今日はアインツベルンへ攻めに行こう。」

何故俺がこんな焦っているか、それは奴、バーサーカーに勝てなかったのだからかもしれない。それか、『俺』が介入してるせいで物語が変わっているかもしれない、という事からかもしれない。すると、バーサーカーは自然と最優先目標になる。

「じゃ、今日の昼には行きましよう。」

三人称視点（とある場所にて）

「フハハハハ！そんなものか大英雄！その様なザマでは俺の宝具は捌ききれんぞ?! さあ！もつと全力で来い！」

声を発しているのはこの世のものとは思えぬような整った顔。金色の髪。そして、その青年の後ろには黄金の波紋があり、沢山の“宝具”を覗かせている。

対するは、途轍も無い筋肉のついた巨体を持ち、顔は武人の様。そして右手には巨大な石剣を手にしている。

「■■■■■■■■■■ッ！」

男が獰猛かつ、確かな意思の籠った声を発した。

「曰く！ヘラクレスは12の難業を課せられ、それを果たした事で漸く神の座に迎えられたという！俺の宝物庫にはこの世のありとあらゆる宝具の原典があるが、貴様のその宝具だけは無い。お前の宝具とは！貴様の肉体そのものであるからな！何度焼こうが何をしようが

立ち上がってくる英雄は見飽きたが……よもや、本当に死から蘇る者が居ようとはなあ！」

男は青年によって黄金の波紋から覗く宝具を刺され死んでいた筈である。だが、青年の言葉通り、死から、蘇ってみせたのである。

男は「12の試練(ゴッドハンド)」という自らの逸話を昇華させた肉体そのものの宝具を所持している。その効果は、12回もの数を、死から蘇る事が出来る。そして、この宝具はもう1つ効果があり、Bランク以下の宝具を無効化するというものである。

だが

青年は伝説がさらに昇華され、とあるスキルを手に入れた。その名は、「この世全ての王」。このスキルは彼が世界全ての宝具を集めた逸話から生まれたもの。その効果は、“自分の持つ宝具をAランク以上まで引き上げる”、というものである。EXは彼の持つ唯一つの宝具のみだが、全ての宝具がAランク以上という事に意味がある。男の宝具によって“Bランク以下の宝具”は無効化出来るが、彼はスキルによって、“全宝具”が“Aランク以上”となっている。

つまり、男は自らの技術のみで、“全宝具を撃ち落とさなければならぬ”。

それが可能か、と言われると、不可能である。

「フツハツハツハツハ！無様よのうへラクレス！命を全て使い果たして我の宝具に全身を刺されるとはな。ハツ！実に詰まらん。貴様ならば、俺と同じ半神ならばと期待したのだが……どうやら違ったらしいな。最後までその聖杯の器を手放さなとはな。見た目に魅了されたか？幼子のような見た目であるから、自分が守られねばと正義感が湧いたか？フンツ！実に実に実に詰まらん！その様な考えに動かされる小物ならば、疾くこの世から去るがよい。」

青年は容赦無く宝具を男に放つ。男は完全に絶命し、傍らの少女は、その心臓を青年に抉られ、この世を去った。少女は最後こんな言葉を残した。

『いつまでも……一緒だからね……バーサーカー……』

死にゆく様は、まるで、先に英霊の座へ帰った男を追うようだった

主人公 side

俺は今遠坂達とアインツベルンの城へと向かっている。バーサーカーを倒す為だ。

↳移動中↳

取り敢えず城の入口、門に着いた。来るまでにトラップがあつて遠坂が全部見事に引つ掛かつたけど。

中に入った。そこにはイリヤが待ち構えていると思つたら

「何よ……これは……！」

そこに広がっていたのは、石柱は無惨に崩れ落ち、床にはヒビがあり、中央には大穴があき、壁には所々血が飛んだ跡があつた。

「……取り敢えず、地下への正規の階段を使つて下に行つてみよう。」

俺がそう言うと、「それもそうね……」と言いながら、歩みを始めた。歩いている途中、思つた事が、1つあつた。

物音1つ無い。

何か音の1つでもあるだろうと思つていたのに、聞こえるのは俺達の足音のみ。

まさか!?

「不味い！遠坂！急げ！」

「どうしたのよ!?!」

「もしかしたらバーサーカーが既に倒されてるかもしれない！」

「何ですって!?!」

「それは本当ですか士郎!?!」

そう言いながら俺達は急速に足を進めていく！

そして俺達が見た光景とは！

「……1体、誰が……」

数本宝具のようなものが床には落ちてている。いや、もう地面と呼ぶのかもしれない。辺りには明らかに多い血液。地面や壁などには沢

山くぼみ、クレーターの様なものが出来てしまっている。

そして、イリヤは

「イリヤ…… そんな……」

無惨にも心臓を抉られ、大量の血を流し、絶命していた。

俺はこう見えてもイリヤが結構好きだった。前世から。だから今回は救ってみせると決心、したのに……

「まだ…… 何も…… 何一つ…… 救えて無いじゃないか……」

—— そんな言葉が口から零れる。

後悔しているうちに、上から声が聞こえた。

『君達、早く私の下へ来るがいい。真実を教えてやる。』

それは遠坂の弓兵、アーチャーの声に他ならなかった。

「…… ツ！急ぐわよ！衛宮くん！」

「ああ、遠坂。」

俺達は強化の魔術を掛け、セイバーは魔力放出を使い、一気に声のした場所へと向かった。

く移動中く

少し長い階段の上の所に立っていたのは、アーチャーだった。

「ふむ、漸く来たか。では、少し話をしよう。」

「話、ですって？」

「ああ、とある無能な王の話しさ。」

「そいつは、とある村の子だった。親の言う事をよく聞き、しかもルツクスも良い。正に好青年という奴だろう。そいつは親と一緒に街に出向いた。そいつは親に1時間くらい自由にしているよと言われて森の方へ行った。少し進むと丘があった。その丘には1振りの剣が刺さっていた。それはとても綺麗な剣だった。黄金色の柄。様々な装飾がされている見た目。それが欲しいと思ったそいつは、あろう事か剣を抜いたんだ。暫くすると、そいつの下に女の魔術師が来た。するとそいつは言った。『君は今日から王だ。【選定の剣】を抜いたからには、その責務を、果たしてもらおうよ。』とな。その日から『王』は民

の為に尽くした。国が悪化しないよう努力した。円卓の騎士という騎士の精鋭を集めた専属の集団を作り、戦争においては敗北を喫した事は無かった。ある日1人の円卓の騎士がこう言った。『王よ、どうか貧困な村の者達も助けては頂けませんか』と。当然そいつは無理だと言った。国の食べ物に限られているしな。すると騎士はこう言った。『何故！そんな簡単に民を捨てる事が出来るのですか!?! 貴方は王ではないのですか!?! 王と言うのならば全ての民を助けるべきではないのですか!?!』そいつはこう言った。『王には……人の心が分からない……』とな。それからは酷かったよ。作物はどんどん荒れ、民は死に絶え、戦争では騎士が1人去ったことにより撃退という形だけになり。そいつはいつの日か、それに耐えられなくなった。だから、あの女の魔術師に相談して、世界の様々な時代の人類にとつての害をひたすら倒していった。当初はそれで何か見つける事が出来れば、と考えていたが、やはり、何も得るものは無かった。そいつは暫し女の魔術師と共にとある場所で眠りにつく事にした。さて、これがそいつの末路だ。では、次は馬鹿な理想を叶えようとした打算的な男の話をしよう。」

「男はさっきの王の魂を持っていた。だが、それに気付くことなく、偶然トラックに轢かれた。神とやらに出会った男は自分が王の生まれ変わりだという事を知る。それから、その男は1人の少年として生きる事になった。そして、その少年、餓鬼の正体がこの俺だ。俺は、とことん失わないように戦った。歴史通りになるべく動き、尚且つそれに少し改変を加えようとしてな。まあ、結局は下のシナリオを辿るのみになったのだが……」

俺はこいつが未来の俺だと知っていた。だが、何処まで一緒なのかはあんまり分かっていなかった。

こんな、悲痛な程何も出来ず、助ける事も出来ずに下の通りを進んでしまっている事に俺は……

少し、恐怖してしまった……

俺は、SNの話なるべく守り、そこに俺がしたい修正を加えようと思った。

でも、結局、まだ、何も、救えてなんか、いない。

今回だつてそうだ。イリヤを救おうつて意気込んでいたのに、それがこの様だ。俺が未来のこいつに恐怖を抱いたのは、俺は未来永劫、もしかしたら、何も出来ないまま唯自分を強くしただけで、そのまま抑止力と契約して使い古されるのではないか……と。

「ふん。衛宮士郎。貴様は今恐怖しているだろうか？ そうだろうな。自分が目指したのはあくまで改変を加える事。それを生涯1度も出来ず抑止力に動かされているのがお前の未来だからな。まあ、もしその様な事を思ってしまったのなら」

―― 奴は1本剣を投影して渡してきた。

「今ここで、自分でその剣を心臓に突き刺し死ぬがいい。」

―― 俺はここで死んだ方が良いのだろうか…

「駄目よ衛宮くん！」

「士郎！」

ごめんな皆…… 俺には、結局何も……

ふと、懐かしい声が聞こえた。

『そんな事は無いよ。君は、昔の事を忘れたのかい？』

アーサー…… そう思ったら、急に記憶が蘇った。

《皆！離れてろ！ 【十三拘束！円卓会議開始！】

【全円卓、承認】、【約束された…… 勝利の剣】 アアア！》

《おお、災害が…… 希望の光だ…… ま、まるで騎士だ！》

絶望を、退けた。

―― 1つ、助けた

女の子が泣いていた。

《う…… ぐす…… ままぁ……》

辺りは火の海。もう女の子に火が届きそうだ。

《もう大丈夫だ。兄ちゃんに任せとけ！ハアツ！セイツ！う
おおおおお！》

火を退けた。

―― 2つ、助けた。

そして、最後は、前世の記憶。

《あれは…猫!?危ない!》

3つ、助けた。

『君は3つも救ったんだ。本来こぼれる筈の命を。全てを助けようとして、結果的に失うものは自らの何か。確かに自己犠牲もあつてはいけないが、多くの人を助けた。命を拾った。これだけでも、充分助けたと言えるんじゃないのかい?だから、まだ、ここで折れる訳には、いけないんじゃないのかい?』

そうだ、俺は忘れていた。本当は助ける事が出来てたんだ。なら、あいつに言わなくちやならない。

「アーチャー、俺は、「お前」も、救えた事は、あつたぞ。あの大災害の時に多くの人と女の子を救い、前世では1つ命を助けた。どうだ、3つも、助けているぞツ!」

俺は奴に言つてやった。

「そんな事も、あつたな。しょうがない、お前には優しくない【事実】を教えてやろう。」

『I am the bone of my sword.

体は剣で出来ている

Steel is my body, and fire is
my blood.

血潮は鉄で、心は硝子

I have created over a thousand
blades.

幾たびの戦場を越えて不敗

Unknown to Death.

ただの一度も敗走はなく

Not known to Life.

ただの一度も理解されない

Have withstood pain to create
many weapons.

彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う

Yet, those hands will never ho

Id anything.

—— 故に、その生涯に意味はなく

S o a s I p r a y , U N L I M I T E D B L A D E
W O R K S .

—— その体は、きつと剣で出来ていた 』

世界が侵食される。そして、気付くと、そこは荒野だった。唯の荒野ではない。辺りには真っ黒な剣が沢山墓標のように刺さっており、空は紅く、歯車の様なものが幾つも歪に回っている。

「貴様がどれ位通用するか、自分の戯言を信じてやってみるがいい。」
途端に、奴は投影をしてこちらへ走ってくる。

【投影、開始】！

俺も投影をして、迎え撃つ。だが

「ハアッ！」

アーチャーにより、俺の双剣は粉々に砕かれた。直ぐに新しく創る。

【投影、開】

言う前に、奴に肩を刺される。

「どうした？ 魔力が多いなら投影も強くなると勘違いしたか？ もしそう思ったのならとんでもないな。剣の構造や年月、様々なものを限界まで模倣せねばならんからな。それをやらず、身の上だけと模倣とはな…… 実に、嘆かわしい。やっついて悲しく思える。」

俺の剣には、中身が、無い

「そんな事はっ！ 無い！」

【投影……… 開始】！ 【擬似改革】！ 【擬似暗示】！

もしも中身が無いのなら、その中身すらも相手から模倣するのみ。

「ほう…… いいだろう。俺の贋作を真似たという事は、着いてこれるんだらうな？」

悔るかの様に剣を構え立っている。

「行くぞアーチャー！ ハアアアアア！」

俺は奴の動きをトレースする。

【同調、開始】！

——憑依経験、共感終了

とことん真似てみせる。それが、俺の本懐じゃないか！

「セアッ！ハアッ！」

奴は涼しそうに受け流す。

糞、何が足りない。1体何故ついていけない。

「お前には圧倒的に足りないものがある。それは」

——覚悟だ。

俺とあいつの声が心の中で重なる。俺には覚悟が足りない。それは俺も分かっている。

——ごめんな、セイバー、遠坂。俺は…… もう

それを見た。

《君はこれから王としての責務を果たさねばならないよ。覚悟はいいかい？》

それを、見た。

《王よ…… 貴方には人の心が分からない……》

遙か昔辿った、それを見た。

《それには危険だけが伴うんだよ？ 生きたまま抑止力の駒の様に動くなんて……》

前には『自分』がこちらを見ている。

「その、『俺』、お前のやり方は、正しいものだったな。」

「…… 唯の村の子だったからね。色々と不器用だったんだ。」

「色々と、失くしたものがあのように見えた……」

「…… それは違うよ。民を無くさないよう、皆に迷惑を掛けないように意地を張ったから、僕は君の肉体となっていた。いや、でも。1つだけ、忘れた大切な記憶がある。」

最初に、それを見た。

《ありがとうございます王よ！》《ありがとうございますお兄ちゃん！》《貴方のお陰で我々は本当に豊かに暮らせております……》《君は本当に凄いな。》

《これは…… 剣？ 抜いてみようか……》

おい、その先は地獄だぞ。

《君は…… 王に選ばれた。選定の剣。【勝利すべき黄金の剣】にね。》
《王…… か。まだ実感が湧かない。でも…… 僕の全身全霊を以て、王の役目を果たし通してみせるよ。》

何だ、覚悟の決め方なんて簡単じゃないか。なら、俺も行かなきゃな。

「待て、その先は地獄だよ？」

「これが、お前の忘れたものだ。確かに、王としての日々は苦痛だった。でも、同時に喜びだったんだよ。誰かの役に立てている気持ち、感謝されている事を知り仕事をやり通した。お前が落としたのは、その途中で心の何処かで無くしてしまった優しさだ。」

『【約束された…… 勝利の剣】アアア！僕は、負けてられない！民を、皆を守る為に！』

それを見た後、俺は歩みを進めた。目指しているのは丘に1つ刺さっている選定の剣。

剣の下に辿り着く。

「その人生が、絶望だらけだとしても？」

「ああ、その人生に、幸福が無いとしても。」

「俺は、皆を守り続ける！」

選定の剣を引き抜く。

「君は僕で、僕は君だ。」

「そして、2人で漸く、」

—— 《アーサー・ペンドラゴン》だ。

—— 諦めてなんか、いられるものか。

「なっ、彼女の鞘!? そうか、切嗣が埋め込んだもの……!」

俺は、その言葉を思い浮かべる。

「あれは聖遺物、召喚されたのではない。まさか…… 体が『それ』だからか！」

「《体は……》」

「貴様っ！」

それを、告げる。

「《剣で出来ている》。」

「フンッ！」

奴が陰陽双剣を飛ばしてくる。

「お前には……負けられない！」

「ハアッ！」

俺も双剣で弾く、俺の刃は、残っている。

「誰かに負けるのはいい。けど、自分を否定する自分に負ける訳には
いかない。」

「……漸く始まりか。だがそれでどうなる？ 実力差は歴然だと、骨
の髄まで理解出来た筈だが？」

「俺の体はまだ動く。負けていたのは俺の心だ。お前を受け入れ、負
けていた、俺の心が弱かった！」

「何……？」

「お前の人生は、ただ逃げていただけだ。でも、俺はそんな事しない。」

「俺は全てを救い、導く者になる！ お前が俺の在り方を否定するよう
に、」

「俺も死力を尽くして、お前という末路を叩き潰す！」

番外編 アーサー君のFGO日常＋主人公のス
テータス

○月×日

俺の名前は浅野 竜。FGOをやってる一般人だ。

さて、今日はとある事をやらねばならない！それはあ！

種火集めだ！（キリツ）

何故必要なのか、教えてやろう。それは、今や俺のカルデアには星4鯖と星3鯖で溢れかえっている。ん？おい、今星5とか言ったやつ後で表出やがれ。

さて、溢れかえっている鯖も初期鯖位しかレベルが上がっていないし、再臨も出来ていない。因みに今日はバーサーカーの日。うーん、上げるのはヘラクレスと茨木とランスロットかな。

数時間後（に書いた）

ふう、終わったぜ。何とかヘラクレスとランスロットは出来た。

クソツ、茨木の再臨素材早落ちろやああああ！

そんな事を思いつつ、今日もガチャを引く。本当なら魔法のカードを買いに行つて宝物庫（ガチャ）の中から財宝を取り出したい所だが。さて、チャンスは一回。これを楽しみにしていた。では、レッツ
ゴー！

三本ラインが出る。お、取り敢えず鯖。さて、続きは…

バーサーカーか…… んで…… お！バチバチなつたぞ！う

おおおお！いけええ！

「AAAAAaaaaaaa！」

こんの不倫騎士がああああ！何体出てると思つてんだあ！もうお前のお陰で宝具レベルMAX達しちやつたよ！ふざけんなあああ！

○月×日

さて、諸君。突然の襲来と言うのを知っているかね？私は知っている。最も、今知るまでは思わなかったがね？

『こんにちは、カルデアのマスター君。私はマーリン。人読んで花の魔術師。気さくにマーリンさんと読んでくれ。堅苦しいのは苦手なんだ。』

そう、マーリンがうちのカルデアにやってきた。

いやっほおおおお！よしやああああ！初星5鯖
じゃああああ！

今日は丁度キャスターの日！すぐ育てられる！行くぞおおお！

やり方は簡単！鬼ヶ島イベントの金時に起源弾を持たせてパーティーに編成！もう一体はクリスマスイベントのサンタオルタ！またまた起源弾を持たせる！そして連れていくフレンドはオジマン！よし！出発だあああ！

数時間後（に書いた）

ふう、長い戦いだっただぜ。良い汗かいた。さて、マーリンはもう既に再臨も最終段階までいったし、レベルもMAX。聖杯も存分に使った。よし、これで俺は無敵だあああ！

○月×日

は、ははっ。ちよつと聞いてくれよ。

俺はいつもの如く種火周回を終わらせてガチャを引いたんだ、そして……

『サーヴァント、諸葛孔明だ……何？別人じゃないか？その通り、エルメロイ二世だ。だが力は引き継いでいる。問題じゃあない。』
エルメロイ二世。こいつはマーリンと同等位の性能、もしくはそれ以上の強さを誇るキャスタークラスのサーヴァント。

な、なんてこった。俺もしかして明日死ぬんじゃない？いや！死んでたまるか！明日はプロトアーサーのピックアップだぞ！なんの為に課金を我慢したと思っている！よしやあ！生きてやるぜえ！

日記外

その後、一人のFGOプレイヤーが学生時代のいしめっ子によって殺されたらしい。

アーサー君のステータス

クラス：セイバー(冠位)

真名：アーサー・ペンドラゴン

性別：男

イメージカラー：白

属性：混沌・正義・秩序・守護

好きなもの：お菓子全般・スイーツ・人類の笑顔

嫌いなもの：人類悪・不幸・間違った正義・人類の敵

天敵：アーチャークラス・アヴェンジャー

ステータス

筋力：A+(EX)

耐久：EX

俊敏：B(A+)

魔力：EX

幸運：EX

宝具：EX

宝具

【我が栄光は未だ輝く】(ブレイド・オア・ワールド)

ランク：EX

対悪宝具

レンジ：??

最大補足：??

詠唱

I am the bone of my sword.

体は剣で出来ている。

我が身は未だ果てん。

円卓の意思は未だ果てん。

正義は未だ果てん。

我が身は剣と共にあり、円卓と共にあり、
ならば、我が身は

【Braid・or・world】。

説明

これは彼の在り方そのもの。固有結界という結界宝具である。この結界内に眠るのは円卓の騎士の武具、そして彼が目にしてきた宝具が静かに佇むかの様に突き刺さっている。大地は黄金、空は蒼。この世界に歪な思いは何一つ無く、彼の正義が具現化しているかのようである。

宝具

【約束された勝利の剣】（エクスカリバー）

ランク：EX

対人類悪宝具

レンジ：10～100

最大補足：1000～1000

発動時

「円卓議決開始（デイシジョン・スタート）。」

《承認》

《全円卓、了承》

《使用を許可する》

「聖光の輝きよ、命を拾いたまえ。今こそ人類を救う時。

【約束された勝利の剣】。」

説明

これこそ、彼の常勝の王が持ちし、星に鍛えられし【最強の幻想】。人々のこうであって欲しいという願いを星が形にしたもの。聖剣の中で最も強い宝具として語られる。この宝具の一撃は、英雄王の蔵に眠る乖離剣の一撃をも打ち砕く。

宝具

【全て遠き理想郷】（アヴァロン）

ランク：EX

結界宝具

範囲：1人

説明

この鞘こそは、星の聖剣を納めし、最強の鞘。所有者の傷を即座に直し、契約者であればその身に迫る害悪を退ける。乖離剣の一撃も凌ぐことが出来る。

保有スキル

【クラス保有スキル】

対魔力：A++

騎乗：B+

【固有スキル】

投影魔術：EX

魔力放出：EX

星々の願い：EX

人々の願い：EX

千里眼：EX

正義の味方：EX

5話 戦いの果てに

主人公 side

「俺も至力を尽くして、お前という末路を叩き潰す！」

俺は奴に言い放った。もう、真似る事なんて要らない。俺は、「一人」なのだから。

「なら、その足掻きを見せてみるがいい。」

奴は陰陽双剣を投影して、こちらへ向かってくる。もう偽物を作る理由は俺にない。

「【約束された勝利の剣】！」

だからこそ、この聖剣を顕現させる。今の俺には、これが一番いい。「なっ!? くっ、だが、技術で劣ることを忘れていないだろうな！」

「俺はもう、【一人】になった。だから、本来の動きを、する事が出来る。行くぞ、アーチャー、いや、俺の末路。叩きのめされる準備は充分か。」

そう言つて、俺も奴に向かっていく。

「ハアアアア！」

俺は奴に向かって魔力放出を全開にして切りかかる。

「セアア！」

奴の陰陽双剣を叩き割り、そしてそのまま二撃目を繰り出し、三撃目も叩き込む。

「グッ、ガハアツ！」

奴は傷口から血を流しながら、口から血を吐き出した。

「……………これが、お前の『重さ』か。ふんっ、その様だと大丈夫そうだな。では————本気を出すでしょう。」

急激に奴の傷が塞がり、治っていく。

—————
— どういうことだ!?

あいつは確か『アレ』を埋め込まれていない筈だ、何故!?

「お前は今何故、と思っっているのだろう。当然だろうな、だがな、いつ私に埋め込まれていないと口にした?」

!?

駄目だ、やつ言葉の中にそんな事一つもない。馬鹿な!?

「では、宝具の打ち合いと行こうか、衛宮士郎?」

奴の顕現させた聖剣から発せられる光が激しくなる。

「くそっ!頼む!今だけは!力を貸してくれ!」

聖剣にそう言う。すると

【王の帰還を確認、これより聖剣systemの再起動を開始、set upまで、残り10秒、10、9、8、7、6、5、4、3、2、1】

【聖剣system起動完了。versionを確認、version：EX+、これより円卓議決に移行する】

なんだ!?!これは……

【全円卓、完全なる意見の一致、これよりBoostTime、カウント、FIVE、FOUR、THREE、TWO、ONE、Start：up、booster】

急激に聖剣の輝きが増す、アーチャーのものよりも輝きが強いつ!

「なんなのだそれは!?!どういう事だ!」

「アーチャー、どうやら俺の聖剣はくそつたれな俺の為に構造が作り替えられたらしいな……ケリをつける!」

【system：all green 正常稼働確認、現時点を以、人類の希望：『約束された勝利の剣』を起動します】

【約束された】………

【約束された】………

そして、同時に放つッ!

【勝利の剣】アアアアア!」

極光が剣の墓標の世界を照らす、そして、天へと光が上り、雲が消え、青空が見える。

「負けてたまるかあああああ!」

「貴様アアアアア!」

「ウオオオオオオオオ!」

そして、光が収束する。その場に立っていたのは

「勝ったぞ、アーチャー。」

俺だった。そして、霧が晴れると

「ああ、そして私の敗北だ……」

奴は既に満身創痍だった。右足が消え去り、右の腹が抉れ、全身が火傷だらけになっている。

段々と空間にヒビが入り、世界が戻っていく。

「……衛宮士郎、最後に凜に合わせてくれ、言いたい事がある。」

「分かった。」

俺は遠坂を呼んで、連れてくる。

「アーチャー、なんで、いきなり私の前から消えたの……？」

「特に深いものはないが……まあ、その餓鬼に地獄を教えてやろうと思っただけ。まあ、最も地獄を乗り越えたようだがね……」

「……あんた、もう一回契約しなさいよ、そしたら、まだ」

「それ以上は駄目だ凜。私はもうこの通り戦いに負けた。しかも、君のサーヴァントの役を一度降りたのだからね、私に君のサーヴァントになる資格はもう、無い。」

「だけど、そしたら、あんたは……」

そう、彼女はもうアーチャーの正体を知っている。だから、こう言っているのだ。

「ふむ……参ったな……大丈夫だ、凜。いや、遠坂？」

「!?」

「見ての通りその男は甲斐性無しでヘタレで尚且つ心が脆い。どうか支えてくれると嬉しい。」

俺が甲斐性無しのヘタレ野郎だとお!? ガラスメンタルだとお!?

「ええ、そんなの昔から知ってるわよ、つまり、貴方もそうだったこともね？」

「ハハッ、お前には敵わないなあ、じゃあ、後は頼んだぞ、遠坂、そして、『俺』」

「ええ！」

「勿論だ、お前こそ、ぼっちだからって泣いたりすんなよ！」

「なっ、貴様ア！」

「ハア、さて、では私はもう行くよ。また会えたら、その時はよろしく頼む。」

そう言い残して、奴は消えていった。

6話 最強

アーサー side

奴、アーチャーは既に座に帰った。さて、これからどうしよう。

「遠坂、これからどうする？先ず何処から潰すかだが……」

「そうね…… やっぱリキャスターかしら。」

「セイバーは対魔力があるしそれもそうか。」

俺たちがそう話していると、それは突然飛んできた。

「士郎ッ！」

セイバーが突然飛んできたそれを剣で弾き返す。

「ほう？今のを弾くか。相当にスペックが良いようだなあ……」

声のした方を向くと、そこには、とてつもないカリスマを放つ、金

髪の青年だった。

「あんたは…… ギルガメッシュ!?」

「ほう、我の名を知っているのか雑種？そうか…… 貴様言峰の弟子と

やらか。聞いておるぞ？飛んだお転婆娘だとな。」

「う、うるさい！誰がお転婆娘よ！それより！何であんたは此処にいるのよー！」

「何、興が乗っただけの事よ。それよりも……」

次の瞬間、一瞬で体が固まった。

「誰の許しを得て…… この我を見上げる？貴様ら地を這いつくばる事しか出来ぬ雑種風情に何時我が発言を許した？」

「「ッ?!」」

「所で…… その贗作よ、何故あの”聖剣”を持っている？」

「!?不味い！奴にだけは知られてはいけない！」

「お前には関係ない！」

「ほう、雑種風情が随分と喋るではないか？これならば忠実に主の下で服従する犬畜生のほうがマシであるなあ！クックック、ハッハッハッ！」

く、畜生！こいつ！

「何が目的でここにいる！」

「興が乗っただけ、と言ったであろう？分からののか？同じ事を二度も言わせるでないわ。」

奴がそう言うのと、後ろに黄金の波紋が現れ、剣、斧、槍など計10個程度の”宝具”を飛ばしてきた。

「ッ！【約束された勝利の剣】！」

俺は約束された勝利の剣を顕現させ、奴の剣等を全ていなす。

「ふむ、見せたな？」

「ッ!？」

そういう事か！奴は怒っているのではない！唯聖剣を出させようとしてたんだ！クソッ！

「貴様はこれで言い逃れが出来んな。さて、ではもう一度問おう。何故それを持っている？」

しょうが無いッ、明かすか。

「俺は、衛宮士郎であってそうではない。俺は、並行世界のブリテンの王。アーサー・ペンドラゴンだ。」

「なんですって!？」

「なんと……」

二人は驚いている。まあ、そうだよな。俺とアーチャーの戦いを見てたって言っても砂埃も起こっててあんま見えてないしな。

「クツクツク、クツハツハツハ！本当に面白いぞ貴様！我の目で見て貴様を覗いていたが、想像以上であったなあ！」

「その聖剣ならば、我のあの剣にも勝てるやもしれんなあ！まあ、最も、そのような事はこの我が許さんがなあ？」

くっ、こいつ、とことん人を……

「さて、興が更に乗ってしまった……それで雑種、貴様を我の暇潰しの相手としよう。そら！貴様の自慢の心象でも出してみろ！それくらい無くては面白くないからなあ！」

なら、見せてやろうじゃないか！本当の心象を！

「行くぞ英雄王。見ておけ。」

I am the bone of my sword.

体は剣で出来ている。」

それは、俺の在り方を示す。

「我が身は未だ果てん。」

それは、まだ理想を果たしていない事を示す。

「円卓の意思は未だ果てん。」

それは、彼らの存在は過去未来何時でも存在している事を示す。

「正義は未だ果てん。」

それは、俺の本懐を示す。

「我が身は剣と共にあり、円卓と共にあり、」

この身は剣であり、騎士王であり……

「ならば、我が身は！」

【Blade・or・world】！」

瞬間、世界が塗り変わる。

ある男は自分の正義を果たした。

ある男は想い人の元を離れ自分の道歩んだ。

ある男は、無限の剣を持っていた。

「これが、俺の心象風景、そして、固有結界。ここには、円卓の魂が眠っている。行くぞ、我が騎士達よ！」

俺がそう言うと、俺を中心に周りに刺さる剣が抜け、そして持ち主が亡霊として現れる。

「俺には仲間がいる。だから、お前には打ち勝つ！行くぞ、英雄王。武器の貯蔵は十分か。」

「ハッ！精々足掻いてみせるのだな、贗作よ。そして、地を這いつくばるがいいぞー。」

——そして、戦いが幕を上げた。